

作って遊べる駄菓子屋さん 地域を盛り上げるプロジェクト

1. はじめに

私たち6人は、課題研究の授業の際に、地域おこし協力隊の方とお話しする機会を得た。その際に8月に商店街ホテルを開催することを知り、その期間中に何か一緒にイベントが出来ないか提案された。6人で話し合う中で、昔の商店街の話題で盛り上がり、その中でも「昔よく通っていた駄菓子屋」の話でとても盛り上がった。そこで、立案したのが「作って遊べる駄菓子屋さん」だ。私たちがよく通っていた駄菓子屋さんは数年前に閉店してしまった。学校帰りには友人たちと駄菓子を買ったり、おもちゃで遊んだり、私たちの中ではとても思い出深い場所だった。そんな貴重な場がなくなつた今、子どもたちに少しでも、私たちが経験したような楽しい思い出の場所を提供し、笑顔になつてもらえたらと考えた。また、近年、少子高齢化により商店街がシャッター街と化し廃れていく中で、私たち高校生ならではの視点で地域を活性化し、コロナ禍の中でも少しでも元気になるつもりという目的もあり、実現に向け一から構想を考え始めた。

2. 構想から準備まで

実際に私たちが考えた「作って遊べる駄菓子屋さん」という案を提案すると「面白い！」と賛同を得て、早速構想を練る

段階に移った。開催日については、沢山の方々に来ていただきたいという思いから、8月7日、14日、21日の3日間で開催することとなった。また、開催時間は、仕事の都合で子どもを連れて行けないという事態にならずに、少しでも多くの子どもたちに来てもらいたいという思いから、10時から18時と、長めに設定した。コロナ禍でお祭りがなくなっていることもあり、駄菓子やアイスの販売だけでなく、くじ引きや射的もできるように、緑日仕様の駄菓子屋にした。場所は「チャレンジ拠点YOKANA」を使わせていただき、配置は縦に長い建物だったため、手前に駄菓子の販売、奥側を射的コーナーとし、奥まで楽しめるようにした。駄菓子の購入費用などは、先輩方が行った「よろくて市」での売上を使わせていただき、準備を始めた。

本格的に準備を始めたのは7月中旬ごろだった。まずは駄菓子屋のことを知っていただくために、チラシ作りに取りかかった。昔ながらの看板を意識し、「作って遊べる駄菓子屋さん」の公式キャラクター「むじよかちゃん」を作って、チラシを完成させた。次に取りかかったのはチラシ配布だ。商店街を中心に1店舗ずつ回り、チラシの掲示をお願いした。自らの足で歩いてお願いに回ると、町の皆さんの温かさを感じると同時に、昔のよ

うに榮え、活気にあふれる商店街ではなくなっていることに悲しさも感じた。子どもたちに来てもらうために、商店街だけでなく、幼稚園などにもお願いして宣伝させていただいた。また、InstagramやTwitterなどのSNSで宣伝をすることで、若い世代や島外の人にも知ってもらえるように工夫した。

次に取りかかったのは、企業様への協賛のお願いだ。私たちがなぜこのようなイベントを開催したいと思ったのか、どのような目的があるのかを伝え、協賛をいただけないかを地域興し協力隊の方に手伝っていただきながら、沢山の企業に連絡した。その中から、チロルチョコ株式会社、宮田製菓株式会社、オランダフルーツ株式会社の3つの企業様に協賛をいただくことが出来た。それぞれの企業様からお菓子やアイス、ストラップを提供していただいた。企業の方と連絡を取るというのは今までに経験がなかったので、手探りの状態で始めたが、優しく対応していただいた。協賛していただいた3つの企業様には感謝しきれない。

次に取りかかったのは、くじ引きや射的の作りだ。全て一からどのような形にするか、景品は何にするかを考えた。くじ引きは、駄菓子やアイスを買うと1回でできるようにし、射的1回無料券、お菓子プレゼント、手描きキャラクターのマグネットを景品とした。喜んでもらえるように、どの玉が出てても何かもらえるようにした。手描きキャラクターのマグネットは、子どもたちが好きそうな可愛いイラストにし、1枚1枚丁寧に制作した。射的は、安納芋やロケット、サーフィンなど、種子島のモチーフとした的を作成し、倒せたらそのキャラクターのステッカーがもらえるようにした。画用紙や割り箸



仕入れ



準備の様子



会場設営

などを使い、何度も試作しながら小さい子どもたちでも簡単に楽しめるようにした。また、それ以外にも「むじよかちゃん」を入れた顔はめパネルを作った。

最後に取りかかったのは、駄菓子の仕入れだ。駄菓子は約1700個と、見たこともない量を仕入れなければならなかった。そのため、インターネットでサイトを探し、駄菓子を仕入れた。お店に売っているようなパチパチパニックやポテトフライなどの人気の駄菓子から、コアシガレットやモロッコヨーグルなど昔懐かしの最近あまり売られていない駄菓子も仕入れ、楽しんでもらえるようにした。

この準備段階の中で、取材をしていたとき、MBCニューズナウにて放送された。どんな目的か、どんな風に開催したのかなど紹介していただいた。

3. 地域の方々からの支援

準備を進める中で、地域の方々から沢山の支援をいただいた。駄菓子屋を実施することを話すと、ポン菓子を作っている方が是非一緒に参加したいと言ってくださり、ポン菓子の実演をすることも決定した。お祭りもなく、ポン菓子の存在すらも知らない子どもたちにとって、作る過程から見る事ができ、面白く、貴重な体験になったと思う。また、旧暦の七夕が近かったことから、短冊を飾って子どもたちに喜んで欲しいと笹を持ってきてくださった方もいた。

沢山の地域の方々の協力をいただいて、内容をより濃く、充実したものにすることが出来たと思う。



ポン菓子実演

4. 1日目開催

前日、そして当日の朝もギリギリまで準備と話し合いを重ね、8月7日、遂に1日目がスタートした。10時からの開催で、開催5分後には店内は沢山の家族連れで賑わっており、初日から大盛況だった。6人に助っ人メンバーを加え、係を受付、会計、くじ引きや射的にそれぞれ分担して、全力で楽しんでもらうためのサポートをした。もちろん、コロナ対策として来てくださった方全員に名前や住所などの記入の協力をいただいた。完全に高校生主体で地域おこし活動を行うのは初めてで、なかなか慣れずにもたついてしまった部分もあったが、子どもたちの笑顔という共通の目的のため、とにかく私たち自身も楽しむことを心がけた。協力してコミュニケーションを取りながら行うことで、1日目は大成功を収めることが出来た。

5. 1日目の反省から

2・3日目の開催へ

1日目で予想以上の来店者数により、駄菓子が減り、補充するのがとても大変だった。インターネットでの購入は間に合わない判断し、近隣の店舗に相談し、仕入れることができた。駄菓子が1日目より少なくなっただけでもあり、何か新しい試みを増やせないかと考え、話し合いを重ねた。話し合いにより、福袋、100円で4つ好きなお菓子を選べるコーナー、輪投げの3つを新たに準備した。特に輪投げはペットボトルに色水を入れ、カラフルで可愛くなるように工夫した。景品は、ポイントごとにお菓子をもらえるようにした。射的はまだ幼くできない子どもでも、輪投げだと簡単にできるので、とても楽しんでる様子だった。1日目から2日目の1週間の間で準備をすることはとても大変だったが、それぞれスキマ時間を活用しながら準備を進めた。これにより、1日目に来店した子どもたちにも新たな楽しさを提供出来たと思う。2日目はお盆ということもあり、1日目以上の来客数だった。開催3日目はお菓子の詰め合わせくじを新たに作り入れ、引いた番号のひもを引っ張ることで、ワクワク感を楽しんでもらうことを目的とした。3日目はあいにくの悪天候で2日目ほど賑わうことはなかったが、それでも終了時間の1時間前には駄菓子や詰め合わせくじはほとんど売り切れた。3日間で合計424名の方々に来ていただき、想像をはるかに超える大盛況となった。進路関係で日を追うごとに参加できなくなるメンバーが出る中、毎週工夫を重ねること



当日の様子

とで2日目、3日目も無事に大成功を収めることが出来た。
3日間全て終了したのち、ラジオ「モーニングスマイル」で生電話取材をしていただいた。本番はどんな様子だったのかなど紹介することが出来た。



手作りの袋でどうぞ



駄菓子に釘付け



くじ引き



ポン菓子



射的の様子



6. おわりに

正直、「駄菓子屋さんをやってみたい。」と思いついたときは、本当に実現できると思っていなかった。コロナ禍3年目、なかなか思うようなイベントが出来ない中で「作って遊べる駄菓子屋さん」開催にあたり、地域おこし協力隊の方をはじめ、先生方や地域の方々の温かいご協力をいただき、本当に感謝してもきれない。高校最後の夏休みにこのような地域おこし活動を行うことができ、6人全員の貴重な経験となった。今回のイベントで、沢山の方々からの愛情と優しさを感じ、高校卒業前に改めて種子島について考えることが出来た。種子島の良さは自然の恵み、人の恵みから沢山のアイデアを形にできる点だと思う。沢山の子どもたちが「楽しかったね!」と言って手を振って帰っていく姿や、地域の方々が「凄い! 頑張ってるね」と言ってくださるのを見て、このイベントの目的は果たされたのではないかと思った。このイベントにより、誰かの心に温かさや元気をもたらし、これからの未来を生きる子どもたちの輝く思い出の一つとなってくれたら嬉しい。

鹿兒島県立種子島中央高等学校
 情報処理科 三年
 浦口 美邑 小村 あゆ
 芝 さくら 立石 結月
 徳永 光希 山成 二葉